

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って

小 松 裕

はじめに

恩師という言葉は、なつかしい響きを持っている。

人間の思想形成期にあたる青少年時代に、心から恩師とよべる存在にめぐりあえることは、その人の生にとってこのうえもない幸福であらう。おそらく、田中正造にとつての赤尾小四郎も、恩師とよぶにふさわしい存在ではなかったろうか。

正造が赤尾小四郎（号・覺洲）の私塾に入ったのは弘化四年（一八四七）、彼が数えて七歳のときだとされている。それから安政三年（一八五六）四月一九日に赤尾が死去するまで、およそ一〇年もの長い間、正造は赤尾塾で学んでいる。

しかしながら、なぜか、師の赤尾小四郎に関しては、田中正造もあまり詳しくは語っていない。また、赤尾に関する史料もほとんど残されていないことから、その経歴も謎の部分が多く、その思想も教授内容も、ひいては田中正造が受けた影響も、ほとんど解明されていない状況である。そのせいか、赤尾小四郎に関する研究も、日向康「赤尾小四郎・清三郎・豊三」『田中正造の世界』第一号、一九八四年）や、赤尾楨一「田中正造と赤尾塾」（安蘇史談会会報『史談』第六号、一九九〇年七月）など、ごくわずかしかな存在しない。

しかも、赤尾小四郎の経歴について語るとき、これまでの研究は、そのほとんどを、石井録郎編著『小中村史蹟』（一九

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

三三年）の中の「祖父鷺洲の畧歴」に依拠してきた。これは、ここに「祖父」とあるように、赤尾小四郎の孫の豊三が編著者の石井に寄せた書信をもとにしたものである。豊三の孫にあたる赤尾禎一氏の前掲論文によると、『小中村史蹟』のうち、赤尾家関係の記述の各頁の部分は、祖父豊三が、数え年八十四歳の頃、石井録郎氏より原稿の依頼を受けて書いたものである」という。

「祖父鷺洲の畧歴」は、次のようになっている。

祖父名は秀土通稱小四郎鷺洲と號す（先代の號を襲用す）備後福山城主阿部侯に仕へ儒官を以て二百石を食む。孫七の二男年少の頃酒癖あり。家を逐はれ外祖母萩原氏を尋ねて小中村に至る居る事二年余、實兄早世により復歸して家督を繼ぐ其後福山藩を退去せしとき再び小中村に至り。子弟を教育し安政三年四月一九日荒宿の家に歿す。年八十二淨蓮寺に墓あり。（四〇～四二頁）

これによれば、赤尾小四郎は、備後福山藩の領主阿部家に仕えた儒官で、二〇〇石取りであったことになっている。それでは、赤尾小四郎が小中村にやってきたのは、いつ頃のことだったのだろうか。

『小中村史蹟』の記載によれば、小四郎の父孫七は、旗本金田丹波守（三〇〇〇石）の長男金田伊織の長子で、赤尾家に婿養子に入ったとされている。そして、この伊織の側室が「下野安蘇郡小中村萩原四郎右エ門の女」であり、当時まだ存命であったので、小四郎は、この外祖母を頼って小中村にやってきたという。すなわち、「寛政八年（廿三才）小中村に尋ね寓せしと其頃は光照院にて子弟を教授せり。田中正造氏の父君富蔵氏などその頃の門人なり。祖父は其後舊主に復歸せしが、再退去の際文政四年亦小中に抵り富造氏等の周旋にて阿彌陀堂にて兒童を教授す。住家は田中氏の東隣なり」と云ふ。」と（四〇頁）。

つまり、赤尾小四郎が最初に小中村にやってきたのは、寛政八年（一七九六）で、そこに二年あまりいてから福山藩に仕向し、その後、福山藩を辞去して、再び小中村に舞い戻ったのが文政四年（一八二一）ということになる。

だが、日向康氏は、『田中正造全集』別巻の「年譜附言」の中で、「文政四年には富造がまだ五歳、その時期については豊三手記が誤っているのだろう」と指摘している。だから、当然、赤尾小四郎が最初に小中村を訪れた寛政八年には、「富蔵」は生まれていないから、赤尾の「門人」にはなりようがない。

このように、赤尾豊三の記憶に依拠した赤尾小四郎の経歴とされているものには、つじつまのあわない点が多々みられる。それならば、赤尾小四郎が備後福山藩に勤仕していた二〇〇石取りの儒官であった、という経歴も、はたして実事なのであろうか。そういう疑問が私などには湧いてくるのだが、この点に関して先行研究者は誰一人として疑念をさしはさんでいない。たとえば日向氏は、「年譜附言」の中で、「正造は赤尾小四郎を奥州白河藩阿部家の浪人であったと錯誤していた」と述べているが（五〇二頁）、それが「錯誤」であったとする根拠が示されていない以上、白河藩阿部家の家臣であった可能性が一〇〇パーセント否定されたわけではないだろう。

そのように考えた私は、赤尾小四郎が、本当に、①福山藩阿部家の家臣であったのかどうか、②二〇〇石取りであったのかどうか、③儒官であったのかどうか、などについて調べてみようと思ひ立った。私の本来の研究課題である田中正造の思想からは若干横道にそれることになるが、胸中に湧きあがった疑念を晴らしたい一心で、おそらくは福山藩関係の古文書の中に出ているであろう赤尾小四郎を追って、広島と福山に調査に赴くことにしたわけである。

一 阿部家の変遷と赤尾家——刊本による事前調査

調査に出かけるまえに、『広島県史』や『福山市史』などをひもとき、備後福山藩の歴史などについての事前学習をおこなった。いうまでもないことだが、旅行先の限られた時間内で効率良く史料調査を行うために、事前調査はできるだけ綿

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

密に行う必要がある。

その結果、次のようなことがわかった。

近世初頭、福山藩は水野家の所領であった。しかし、水野家は、継嗣断絶により、一六九八年に改易となり、領地は収公されて天領となった。一七〇〇年、松平忠雅の移封が決定した。福山藩は一〇万石であったが、うち五万石は天領のままとされた。松平忠雅が実際に福山入りしたのは、一七〇九年のことであったといわれている。

ところが、その翌年の一七一〇年には、下野国宇都宮より阿部正邦が入封することが決まり、松平は桑名に移封されることになった。ここから、福山藩阿部家一〇万石の歴史はじまるが、代々幕府の老中などの重職を担うことの多い名家であり、なかでも「開国」にあたって老中首席として日米和親条約などを締結した阿部正弘は特に有名である。

阿部家は、三河以来の徳川家の譜代の家系で、家康の江戸入府に従って関東に下った阿部正勝は、本多正信らとともに旗本等を管掌する位にあった重臣であった。正勝のあとに家督を継いだのが正次で、彼一代の間に、一万一〇〇〇石から八万六〇〇〇石余の大名に発展している。正次自身も老中や大坂城代などの重職を歴任し、ここに阿部家の基盤が固まった。その子重次は、下野国都賀郡の二万石を増加され、父と同様に老中をつとめ、三代將軍家光の死に際して「殉死」したことで有名である。このように、幕閣に重きをなすにいたった阿部家であったが、その後、定高・正春と、しばらくは「不遇時代」がつづき、正邦が家督を継いだのが一六七一年、正邦一四歳のときであった。そして、武蔵国岩槻から丹後国宮津へ、さらに宇都宮へと転封され、一七一〇年八月一五日に備後福山へと国替されて福山藩主となったわけである。それでは、次に、『小中村史蹟』から赤尾家の家系に関する記述を引用し、阿部家の変遷と突き合わせてみることにする。

幼名忠二郎後彌二左エ門と稱す。正徳六年二月廿七日大坂藩邸に生る。左手に米粒を握る故に秀實と命す。字子穀鷺洲と号す享保十八年三月三日十八歳にして備后福山にて初めて正襲公(君侯ならん)に出で事ふ其后西閣公(全上)京都諸司代勤務中公用役相勤後ち江戸に歸り勤勞の久しきを以て五十石加増三百石に至る。官番頭に準し小姓頭たり。安永三年五月十二日江戸圓山藩邸に病卒す。行年五十九歳谷中妙雲寺に葬る。金田丹波守の甥孫七秀章を養ひ嗣となし以て其女鎮に配す、鎮女の墓は小中村にあり。

系圖 初代鷺洲(秀實)

孫七 (秀章)

二代鷺洲(秀士)

秀行 (思敬)

豊三

(三九頁)

ここに掲げられた系圖のうち、本論に關係する二代鷺洲、すなわち赤尾小四郎までを整理してみたい。

まず、初代鷺洲＝赤尾秀實は、正徳六年(一七一六)二月二七日に大坂藩邸で生まれ、安永三年(一七七四)五月二日に江戸の藩邸で亡くなっている。『小中村史蹟』には、「幼名忠二郎後彌二左エ門」とあるが(印字不鮮明のためか)、日向氏の研究によれば「幼名忠三郎後彌三左エ門」の誤りであるという。『小中村史蹟』には、この赤尾秀實の名が『大日本人名辞書』に出てしていると記しているが、たしかにこれは事実である。『大日本人名辞書』は初版が一八八六年(明治一九)四月に出されたものだが、私が閲覧できた第五版(明治三六年八月五日発行、經濟雜誌社)の一〇頁に、「アカオ シウジ ツ 赤尾秀實」として、「赤尾秀實は江戸の儒者なり字は子穀鷺洲と號す安永三年五月一二日歿す谷中妙雲寺に葬る(江戸

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って(小松)

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

名家墓所一覧」と記されてあった。

ただ、享保一八年（一七三三）三月三日に福山で藩主正襲に会ったとあるが、「正襲」という名の藩主は存在しない。このときの藩主は阿部正福（まさとも、治世は一七一五—六九）であったが、正福はまた正襲（まさあきら）とも称したので、たぶん「正襲」の誤りであろう。また、「西園公」が京都所司代のときに「公用役」を勤めたとあるが、「西園」とは、正福の子の正右（まさすけ）の法名が「西園院殿棲替託方練契大居士」であったことから、おそらくは正右のことであろうと推測できる。事実、正右は、一七六〇年より六四年まで京都所司代を勤めているので、つじつまがあう。

そして、その後五〇石加増されて三〇〇石になり、小姓頭に任ぜられたという。ちなみに、小姓頭とは、藩主の側近に侍する格式の高い役職であり、『福山市史』近世編によれば、江戸藩邸には五名の小姓頭がおかれていたとされている。³⁾

次に、赤尾秀章（孫七）であるが、孫七に関しては、旗本金田丹波守の長男伊織の長子で、秀實と養子縁組を結び、秀實の娘と結婚した人物ということぐらいしかわからない。

最後に、赤尾秀土（ひでただ、小四郎＝二代鷲洲）であるが、小四郎の生年は、最初に小中村にやってきた寛政八年（一七九六）に二三歳であったということや、安政三年（一八五六）四月一九日に亡くなったときに八二歳であったといわれていることなどから推測すると、一七七四年か七五年頃の生まれではなからうか。³⁾秀章の二男で、年少の頃から酒癖があったので、勘当同然に家を追い出され、外祖母を頼って小中村に来て塾を開いていたが、二年余りして、長男が早逝したので急遽家督をつぐことになり、福山藩に仕え儒官をつとめたとされている。ということは、一七九八年頃から小中村を再訪する一八二二年までは福山に居住していたことになる。とすると、阿部正倫（まさとも）の子の正精（まさきよ）が襲封したのが享和三年（一八〇三）のことであるから、正倫・正精の二代、主には正精に赤尾小四郎が仕えたことになるのだが、はたしてどうであらうか。

『福山市史』近世編によれば、小四郎在職中の「文化・文政期は福山藩の文化活動の最盛期」とされている（七八五

頁)。これは、藩主正精の好学の氣風によるものというが、そうであるならば儒官赤尾小四郎も大変重んじられたことであろう。ところが、「文政ころの儒者をみると、百石^{大目付}鈴木圭輔、米五拾俵^{大目付}衣川吉蔵、拾五人扶持^{大目付}伊藤格佐、武拾人扶持^{大目付}山室虎治郎の四名である」(七八九頁)と出ているだけで、赤尾の名は出てこないのである。儒者の中で最も家格の高い鈴木圭輔ですら一〇〇石なのだから、二〇〇石取りだったと伝えられる赤尾の名が儒者の中に見当たらないのは、どう考えてもおかしい。

しかも、一般的にいつて儒者の家格は、それほど高くないのが普通であった。たとえば、あの新井白石ですら、最初は三〇〇石であり、六代將軍家宣に召し抱えられたときで五〇〇石(のち一〇〇〇石に加増)に過ぎないのである。だから一〇万石の福山藩レベルで二〇〇石取りの儒者というのは破格の待遇に外ならず、当然儒者の筆頭に赤尾の名が出てきてしかるべきなのに出ていないというのはどうしてなのだろうか。

儒者といえば、今日でも有名な福山藩の藩校弘道館との関係はどうだったのであろうか。弘道館が開設されたのは一七八六年であり、「學術世話取り(総纏)」「儒者本役」「儒者格」「儒者見習」「会説掛り」「素説掛り」などの役職がおかれていた。福山藩の儒学の伝統は、二代藩主正福が伊藤仁斎の次男伊藤梅字を招聘したことにはじまり、代々古学派が主流を占めていた。梅字の孫の伊藤竹坡(一七六〇—一八二八)は、年齢的にもちょうど赤尾小四郎と同じ世代であり、一七九三年から弘道館の「學術世話取り」を勤めていたが、儒者のトップともいえるべき竹坡ですら二〇人扶持であった。また、非常に有名な菅茶山(一七四八—一八二七)も赤尾と同世代といえ、茶山も一八〇一年から弘道館で講釈をはじめているが、それでも三〇人扶持大目付格に過ぎなかったのである。

いわゆる「寛政異学の禁」の影響で、福山藩でも、菅茶山・頼山陽門下の朱子学者が文教の中心にすえられるようになるが、あるいは、赤尾小四郎は、こうした古学派、朱子学派という主流からはずれたところにいたので、儒者であっても冷遇されたのか。それとも、赤尾が陽明学者であったという説があるように、陽明学を講じていたのだろうか。後者に関

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

していえば、福山藩における陽明学の伝統は、『広島県史』『福山市史』にもいっさい出てこない。かりに、国学に目を転じてみても、福山藩における国学は、一八〇六年に備中笠岡の小寺清之を招いて神道講釈をさせたことにはじまるとされているが、藩校弘道館では国学教育はなされていない。だから、福山藩における国学・陽明学の存在は微々たるもので、その影響力はほとんど無にひとしかったといえる。

赤尾小四郎は、本当に福山藩の儒者だったのだろうか。ひょっとしたら、田中正造が思っていたように、奥州白河藩阿部家の儒者だったのではないか……。

謎はますます深まるばかりであった。

二 福山転封（一七二〇）前後の赤尾家——広島・福山調査行

広島県にいつて私が調査した場所は、広島県立文書館（以下、県立文書館と省略）と福山市立福山城博物館文書館（以下、福山市立文書館と省略）の二カ所であった。そこで閲覧した史料のおもなものは左に掲げる通りである。1から10までのaもしくは無印が県立文書館所蔵、bが福山市立文書館所蔵の史料である。

1 a 「阿部正春御陣代中 寛文八年 家中人数帳」（請求番号P 07、14—6、A 9 福山市史資料3）

b 「同 右」（浜本文庫四四九）

2 a 「福山藩家中分限帳」（P 07、14—6、A 10 福山市史資料4）

b 「同 右」（浜本文庫四五〇）

3 「享保一二年 福山御家中由緒書上」（『備後叢書』復刻版、第八卷所収、東洋書院、一九九〇年）

4 a 「延享元年 御家中之覚」（P 07、14—6、A 11 福山市史資料6）

- b 「同 右」(浜本文庫四五二)
- 5 a 「宝暦己亥年 福山御役人帳 正月十三日」(4 aに同じ)
- b 「同 右」(浜本文庫四五二)
- 6 a 「宝暦七丁丑年 福山御家中附 四月下旬改之」(2 aに同じ)
- b 「同 右」(浜本文庫四五三)
- 7 「寛政五年 福山御役人帳(九月八日改)」(P 07、14—4、A 52—62 福山誌第一集)
- 8 「天明 寛政 文化 文政 城代家老以下禄高(福山御役人帳)」(2 aに同じ)
- 9 「文化年中阿部家中分限帳(江戸之部)」(1 aに同じ)
- 10 「御旧臣絶家録 天保四」(P 92—32—A 2 東京・阿部家文書^⑧)

上記の史料中、1は寛文八年(一六六八)のものであり、2も、年代不詳であるが、福山市立文書館の『浜本文庫書目録』に「時代は明らかでないが、表紙に「阿部備中守定高、対馬守重次、備中守正邦代」とペン書きの書き入れがある。ほど其の時代のものようである。或は福山藩就封以前のもものかも知れない」(四四頁)とあることから、1と同じく寛文年間のものではないかと推測できる。

まず、1から見てみよう。1の史料には、最初から数えて五一番目に「式百三拾石 赤尾忠右衛門」と出てくる。他の部分にも、「米三拾俵三人扶持 赤尾新五左衛門」という名が出てくる。福山藩の家臣で赤尾姓は、この両名だけである。しかし、この史料だけでは、忠右衛門と新五左衛門の関係はわからない。さらに、

栃木皆川居住

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って(小松)

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

赤尾忠右衛門組

米百五拾七俵 御一簇之者貳拾六人分

右同断

と書かれている点に注目しよう。「右同断」とは、「宍人ニ付六俵小頭ハ七俵／何モ宍人扶持也」ということである。

これによれば、赤尾忠右衛門は、栃木皆川に居住し、小姓組か何かの頭を勤め、二六人（うち一人小頭）の一族郎等を率いていたことがわかる。

2の史料にも、同様に、「貳百三拾石 赤尾忠右衛門」、「米三拾表 内拾表 貳 赤尾新五左衛門」と出てくる。後者の「貳」とは二人扶持のことであり、「内拾表」とは、次のような記載を参照すると、おそらくは「夏取」^①のことではないかと考えられる。

一米三百拾六表 赤尾忠右エ門組貳拾宍人

内八拾五表 夏取 宍人ニ十五表宛小頭ハ十六表也

このように、1と2の史料を対比してみると、赤尾新五左衛門の三人扶持が二人扶持へ、赤尾忠右衛門組の人数が二六人から二一人へ、米が一五七俵から三一六俵に変わっている（一人当たり俵数も）ことが判明するが、記載方法もほぼ同じ様式であることから、いずれも阿部家が福山に転封する以前の岩槻時代から宇都宮時代にかけての史料ではないかと推定できる。

赤尾忠右衛門の名を確認することのできる史料は、それ以外にもある。まず、福山市立文書館を調査したときには見落

としてしまった「慶安元□高拾万石之御役積り 子十二月吉日」(下宮家文書)という史料が『岩槻市史』近世史料編Ⅲに収録されている。この、一六四八年二月、阿部重次の代のものと考えられる史料に、「騎馬貳百騎」として、三千石の三浦左近以下家臣の名と石高が列記されているが、その中に「一貳百三拾石 同断 赤尾忠右衛門」と出ている。「同断」とは、「夫馬一疋／口附一人」のことである。

また、『阿部家御伝記 全』(浜本文庫四一)の「阿部備中守正次事」の項にも確認できる。阿部正次が大坂城代を一三年つとめ、正保四年(一六四七)一月一日に死去したおり、その葬送奉行として「山本新兵エ赤尾忠左エ門斎藤勘兵エ等」の名が記されているが、この「赤尾忠左エ門」は赤尾忠右衛門の誤記であると考えられる。

以上、福山転封以前の阿部家の家臣赤尾忠右衛門についてみてきたが、実は、3の享保十一年(一七二六)の「福山御家中由緒書上」の上巻「赤尾忠三郎秀澄」の項をみると、通称忠右衛門を名乗った人物は二人(厳密には三人)いたことになる。この「由緒書」は、赤尾小四郎のルーツを探る上でとても貴重な資料と考えられるので、いささか長文になるが、煩をいわずに全文を引用してみたい。

赤尾忠三郎秀澄

一、曾祖父赤尾忠三郎、後忠右衛門真秀、元和二年拾五歳に而、正次様へ召出され、知行百石下置かれ、百石之御書出、今に所持仕候、寛永四年丁卯十二月廿三日、三拾石之御書出尙通并知行四拾石御加増、丑十二月廿八日御書出尙通、且又知行高三拾石御加増、辰極月廿六日御書出尙通、右式通は年号御書付御座無く、何年御加増拝領仕候哉、相知申さず候。

一、忠右衛門自筆に而認置候書付御座候、寛文四年辰十月廿五日御前へ召出され、有難く御意之上、御加増五拾石拝領若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って(小松)

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

仕、下官理左衛門、栗飯原八郎右衛門、右之通書付置申候。

一、寛文七年丁未二月十日御戀意蒙り、御旗奉行仰付られ候、隠居仕候節、五拾石隠居料とし下置かれ拝領仕候、右年号相知申さず候。

一、忠右衛門、寛文十一年病死仕候、其節右五拾石召上られ候。

一、祖父赤尾新平、後忠右衛門秀直、父の妻下官弥治右衛門娘、忠右衛門跡式貳百三拾石仰付られ、御陣代様へ勤仕奉り候。

一、寛文十二年子三月晦日御者頭役仰付られ候。

一、忠右衛門、十三ヶ年之長病に付、御役儀御免願奉り、首尾能隠居仰付られ候、貞享三寅年病死仕候。

一、父赤尾新十郎、後弥惣左衛門仲秀、拾四歳之時、家督仰付られ、貳百三拾石下置かれ候、天和元年、拾五歳に而、正盛様召出され、御広間御番仰付られ候、元禄六酉十二月十九日御供番頭仰付られ候、同七戌年八月十八日、御使番仰付られ候、同十一寅年八月十九日御者頭役仰付られ、新組拾五人御預遊ばされ、宝永二年酉九月三日、田村源兵衛跡組式拾人御預遊され候、正徳二辰年、大坂御留主居役仰付られ、御加増七拾石拝領仕候。

一、父弥惣左衛門妻、大沼小左衛門娘、一子御座無く、養子願奉り、三浦彦岐守様御家中、大沼小左衛門倅、母弟に付、小三次儀江戸に於て引取申候、年号知申さず候、此者儀は江戸に於て、彦岐守様、正邦様へ御直に御物語遊され候而、其訳聞置かれ、小左衛門方へ戻し候様仰出され候間、正徳三年巳十月、大坂より江戸へ差戻申候、其後、松平讃岐守様御家中、丹羽与一左衛門倅、忠右衛門儀、養子願奉り、正徳四年午六月、引取申候、享保二年、御供番召出され、大坂より江戸へ召呼ばれ、間も無く御近習仰付られ候、享保元申年、私儀（出）生仕候、忠右衛門儀者享保四年亥大坂に於て病死仕候。

一、亡父弥三左衛門、享保五年大坂に於て病死仕候、私儀福山へ引越仰付られ、同年子十二月十五日亡父勤功に依而、

小児之御例に者御座無く候へ共、知行百五十拾石成下られ候旨、御懇意以て仰付られ候、此節私儀、御番頭支配仰付られ候。

一、私儀幼年に而父に離申候故、由緒之儀、承伝申すべき様も御座無く候、今以若年に御座候へ者、曾祖父書付置候物取集、右之趣相認、指上奉り候以上。(三三八—三四〇頁、傍線小松)

このときわずかに一〇歳であった赤尾忠三郎秀澄が提出したこの「由緒書」によれば、阿部家の家臣としての赤尾家の歴史は、元和二年(一六一六)に、赤尾忠三郎(忠右衛門真秀)が阿部正次に召し出され、一〇〇石の知行地をあてがわれたことにはじまるようである。先に紹介した『阿部家御伝記 全』に出てくる阿部正次の死に際して「葬送奉行」をとめた「赤尾忠左エ門」とは、やはり、忠三郎秀澄の曾祖父の赤尾忠右衛門であったことになる。

この赤尾忠右衛門真秀が亡くなったのは、寛文十一年(一六七二)であるが、寛文七年(一六六七)二月一〇日に「御旗奉行」に任ぜられた後に隠居しているので、二代目の赤尾新平(忠右衛門秀直)が家督をついだのは、一六六七年以降のことになる。とすると、寛文八年(一六六八)の史料¹に出てくる「赤尾忠右衛門」とは、二代目であった可能性が高い。「由緒書」に三三〇石とあることや、「御陣代」(＝阿部正春)に勤仕したとあることも一致する。

ところが、二代目の赤尾新平は、寛文十二年(一六七二)に「御者頭役」に任ぜられたあと、一三年間病を患ったので、その子の赤尾新十郎(弥惣左衛門仲秀)が一四歳で家督を相続することになる。これが赤尾家三代目の当主である。

三代目赤尾新十郎は、元和元年(一六八二)に一五歳で阿部正盛に召し出され、「御広間番」をつとめてから、「御供番頭」、「御使番」、「御者頭」などを歴任し、最終的に正徳二年(一七一三)大坂留主居に任ぜられ、七〇石の加増を受けて三〇〇石の家格となり、享保五年(一七二〇)に大坂で病死したとされている。ただ、長い間子どもに恵まれなかったために、まず、妻の弟の大沼小三次を養子にしたが訳あって縁組を解消、次いで丹羽忠右衛門(これが三人目の「忠右衛

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って(小松)

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

門」になる）を養子にしたところ、これも享保四年（一七一九）に病死した、とある。しかし、この間、享保元年（一七一六）に実子が誕生しており、一七二〇年の新十郎（弥惣左衛門、「由緒書」には「弥三左衛門」ともある）の死とともに、わずか四歳で家督をつぎ、大坂から福山に引っ越した、という。

この四歳で家督をついだ子が、この「由緒書」を提出した赤尾忠三郎秀澄に外ならず、初代の赤尾忠三郎から数えたと四代目（大沼小三次、丹羽忠右衛門の二人の養子も数え入れれば六代目）にあたる。四歳でありながら、亡き父の勤功に免じて、一五〇石の知行を保証されたというのである。

ところで、ここで注目すべき点は、赤尾家四代目の赤尾忠三郎秀澄の生年である。享保元年とは正徳六年でもあり、『小中村史蹟』に紹介されている赤尾秀實の生年月日（正徳六年と一致する。しかも、大坂藩邸に生まれたことや、幼名を忠三郎と称したことなども一致している。初代二代が同じ「忠右衛門」を名乗ったように、忠三郎が長じてのち亡父と同じ「弥惣左衛門」を名乗った可能性も高い。

問題は、「秀澄」と「秀實」の違いをどのように理解するかであるが、まず、「秀」の字が、赤尾家の当主に代々相伝された字であることは、「由緒書」に記された初代から四代までの諱をみれば一目瞭然である。かつ、前述したように、私が見た限りでは、福山藩阿部家の家中に「赤尾」姓は他に見られないので、この四代目の赤尾秀澄が赤尾秀實と同一人物であった可能性は極めて高い。おそらく、いずれかの時点で「秀澄」を「秀實」と改めたものと推測できる。

こうして、私たちは、ようやく赤尾小四郎の祖父、初代鷺州までたどりつくことができた。

三 意外な事実の発見

次に、4の史料に目を移そう。延享元年（一七四四）の「御家中之覚」である。

この史料を最初から一枚ずつめくってみていくと、赤尾家の先代が勤めていた御番頭や小姓頭のところには赤尾の名は見

られないが、「大坂御留主居」として「三百石 赤尾弥惣左衛門」と出てくる。一七四四年の史料であるからには、該当するのは四代目の赤尾忠三郎であろうが、四代目は一七一六年生まれであるから、三〇歳前で「大坂御留主居」を勤めたとは考えられない。福山市立文書館所蔵の『浜本文庫書目録』の記すところによれば、「表紙の「延享元年」は、後の書き加えで、裏表紙に「甲子延享元歳十一月十五日買申候」によったものであるから、延享元年のものではない。只同年以前のものであることが知られるだけで、年代は分らない。」という。三代目の赤尾新十郎が大坂御留主居を勤めたことは先に触れたとおりなので、あるいは三代目のことかとも考えられる。とするなら、4の史料の成立年代は、正徳二年（一七一二）以後、享保五年（一七二〇）までの間ということになろう。

5の史料は、やや時代を下って、宝暦五年（一七五五）の「福山御役人帳」である。この「御小姓頭」の項に、

・貳百石 赤尾弥惣左衛門
・百五十石 田中弥次右衛門
・貳百石 下宮金三郎

と、三人の名が記されており、赤尾弥惣左衛門のところには、「御見央役ニ而江戸御降」と注記がほどこされている。

また、6の宝暦七年（一七五七）の「福山藩御家中附」にも、同様に「御小姓役」として「赤尾弥惣左衛門」の名が上げられており、こちらには「丙子年御見央役ニ而江戸御越也」と注記されている。「丙子年」は宝暦六年（一七五六）にあたる。このことにより、5の史料の注記は、のちに加えられたものであることがわかる。

ここで、『小中村史蹟』の「赤尾秀實伝」と比較してみよう。ここでは、赤尾秀實は、阿部正右が京都所司代のときに「公用役」として近侍し、その後「江戸に歸」ったと記されている。ところが、正右の京都所司代時代は一七六〇年から

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

六四年までのことであり、その後江戸に下ったのなら、6の史料が伝える一七五六年とは食い違ってくるが、「歸」ったという表現からは京都で公用役をつとめる前に江戸に下ったことがうかがえ、矛盾はしない。やはり、5、6の史料の「弥惣左衛門」は赤尾秀實のことであると考えると差し支えないように思われる。

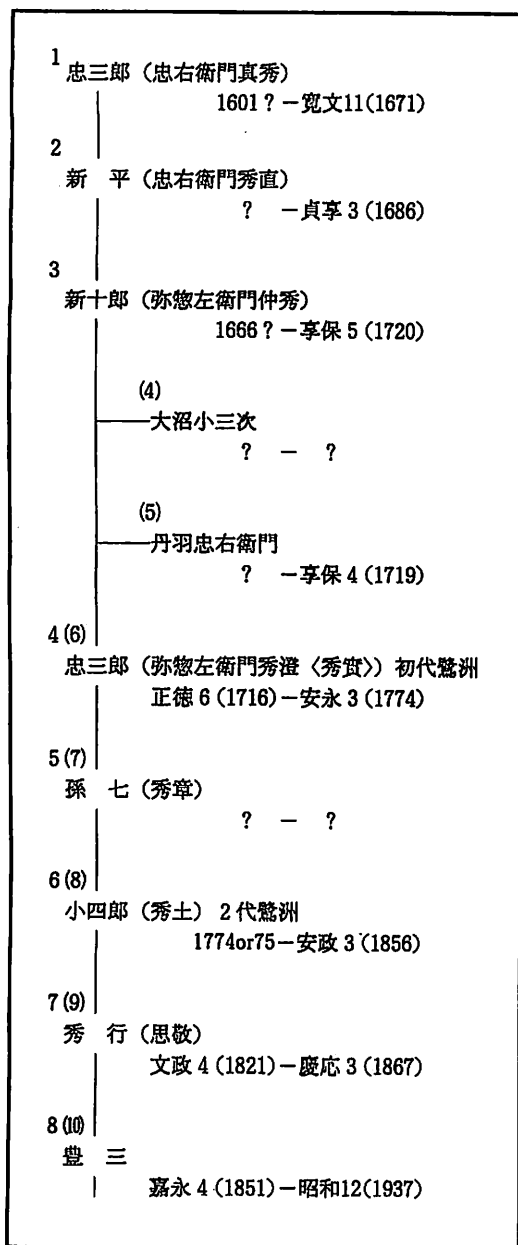
その他、「阿部家御伝記 全」の中にも、赤尾弥惣左衛門の名が二カ所に登場している。その一つは、「阿部伊勢守正福之事」の項で、正福が大坂城代に任ぜられ大坂入りした延享三年（一七四六）二月のおともの中に「取次」として名が掲げられている。

そして、もう一つが、「阿部伊与守正右之事」の項で、こちらは、正右が宝暦一〇年（一七六〇）一二月三日に京都所司代に任ぜられ、翌一一年一月二日に江戸を立ち、二月二日に京都入りをしたときのものである。「家老安藤主馬年寄川田奎用人永峯九右エ門番頭吉田弥五左エ門岡田伊右エ門者頭大平弥一兵衛太田宇門内藤次郎兵エ公用人関平作右エ門赤尾弥三右エ門太田三介村上宇兵エ小姓頭川田藤馬萩原五郎兵エ大目附鶴岡三左エ門今村小弥太須田元右エ門取次五人使番二人諸士七十人相勤同七日参内天盃頂戴」（傍線小松）とあり、赤尾弥惣左衛門が「公用人」を勤めたことが判明し、『小中村史蹟』の記するところと一致する。また、「取次」から「公用人」へと格も上がっていることがわかる。

さらに、赤尾秀實が漢詩文の分野でも名をなしていたことも判明した。福山市立文書館の浜本文庫は、郷土史家であった濱本鶴實氏が収集した資料群を命名したものであるが、その濱本氏が『福山学生会雑誌』第七六号（一九三三年七月二八日）に発表した「福山の文学（二）」と題する文章がある。その「下篇阿部家時代」の第一章が漢詩文にあてられており、「一 松平家時代」から「十二 茶山霞亭を繞る詩人」まで述べてきて、最後に付記の形で、「以上の人々の外に左記の小傳と作例を載せたかったが、余りに長くなるから省略す」として、全部で一五人の名を掲げている。その二人目に「鷺洲赤尾秀實」が登場するのである。ということは、漢詩家としてひとかどの名をなしていた赤尾秀實に濱本氏も注目するところがあり、それなりに資料を収集していたことを示唆している。

赤尾家系図

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）



また、福田録太郎氏の調査記録集である『福山文学』第三輯（一九二二年三月、福山市立文書館所蔵福田家文書）の中の「文士雅号録」を見たところ、福田氏が閲覧したと目される浅川勝周著『福藩詩稿』という書名（？）が記されており、その中に赤尾秀實の詩が収録されていたのか、福田氏は、「赤尾秀実 俗称弥惣左エ門 号鷺洲 字子殷カ」というメモを残している。

以上のように、赤尾家四代目の当主赤尾忠三郎（弥惣左衛門秀實）は、幼くして家督をつぎ、苦勞しながらも主君の近侍として活躍し、そのかたわら漢詩文でも一家をなした人物であった。そこで、これまで明らかにしたことに『小中村史蹟』の記載を加味し、赤尾家の系図を作成すると、次のようになる。

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

ところが、四代目が亡くなった安永三年（一七七四）以降の史料？「寛政五年福山御役人帳」（一七九三年）、8「天明寛政 文化 文政 城代家老以下禄高」、さらには9「文化年中阿部家中分限帳」を見ると、そのどこを探しても赤尾という姓は出てこないものである。『小中村史蹟』によれば、秀實のあと、孫七、小四郎と家督を相続したことになっているのだが、この二人の名は「御小姓頭」にも「御番頭」にも「御儒者」にも出てこない。赤尾小四郎が家督をついだのは一七九八年頃と考えられるので、7の史料に出てくる「御儒者」が二〇人扶持の伊藤貞孝ただ一人であるのは理解できても、孫七の名はいったどこへ消えたのだろうか。また、小四郎が二〇〇石取りの儒者として活躍していたはずの文化年中の史料である9も、「江戸之部」とあるから、小四郎の名が出てこないのも仕方ないのかもしれないが、8にも出てこないというのは何故だろう。ますますわからなくなるばかりであった。

思いあぐねていたとき、県立文書館の研究員の西村晃さんが、「こんな史料がありましたよ」と言って持ってきてくださったのが、史料10の「御旧臣絶家録」であった。この天保四年（一八三三）の史料の中に、次のような部分があったのである。

正次様御代

赤尾孫七

赤尾忠三郎後忠右衛門眞秀元和二年被召出百石被下置其後三拾石四拾石三拾石五拾石御加増忠右衛門病死其節五拾石被召上二代目貳百三拾石三代目七拾石四代目初年^{二而}百五拾石

正右様御代京都公用人其後五拾石御加増六代御番頭格七代退身文化五年軍学出精ニ付^{其後モアリ}御憐愍御供番式人扶持^〇

これまで縷々述べたことを、最後に、この「御旧臣絶家録」とつきあわせて解釈してみることにする。

まず、「正次様御代」とは、初代の赤尾忠三郎が家臣としてとりたてられたのが阿部正次の代ということであろう。史料の前段部分は、先に紹介した「由緒書」をもとにまとめられたものである。「三代目七拾石」とは、七〇石加増されたことを示し、合計三〇〇石になったと読むのが至当であろう。

問題は、後段部分である。「正右様御代京都公用人其後五拾石御加増」というのは、四代目の赤尾弥惣左衛門のことである。とすれば、次は五代目のはずであるが、「絶家録」では、「正右様御代……」を五代目と数えたのか、いきなり六代目に飛んでしまっている。そして、「六代御番頭格」という箇所だが、孫七が「御番頭格」であったことを示す史料は残されていない。「御番頭格」は非常に格式の高い身分であり、孫七が「御番頭格」を勤めていたのなら、当然、一七九三年の史料7にそれらしき記載がなければならぬはずである。小姓頭を勤めた四代目が番頭に準じた格であったことは『小中村史蹟』に窺えるので、あるいはこれも四代目のことかもしれない。

このように、「四代目初年……六代御番頭格」の部分に描かれた事跡は、すべて四代目の赤尾弥惣左衛門のものと考えられるのだが、それなのに弥惣左衛門を「六代」としているのはなぜなのか、いささか解釈に苦しむ史料である。弥惣左衛門が誕生する前にとった二人の養子、大沼小三次と丹羽忠右衛門もそれぞれ四代、五代に数えられたからであろうか。

なぜ私がこの点にこだわるのかというと、それは、その次に「七代退身」と出てくるのに注目するからである。「六代」を四代目弥惣左衛門と解釈すれば、「退身」した「七代」は孫七となり、「六代」を孫七と解釈すれば、「七代」は小四郎となるのだが、はたしてどうだろうか。

私は、やはり、「退身」した「七代」は孫七と考えるべきだと思う。前述したように、孫七の先代の弥惣左衛門が「六代」と勘定されているのであれば、孫七が必然的に「七代」となるからでもあるが、「絶家録」という史料の性格上、史料の冒頭に「赤尾孫七」の名が記載されているのは、阿部家の家臣である赤尾家の最後の当主が孫七であり、孫七の代に絶家されたと読むのが自然でもあるからだ。さらに、「退身」したのが孫七であったと考えるならば、一七九三年の史料7に

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

孫七の名が見当たらないことは、それ以前に「退身」してしまっていたからだと説明できるだろう。

とするならば、一七九八年頃から一八二二年頃まで阿部家に勤仕していたと伝えられる赤尾小四郎は、最初から家臣ではなかった、家臣でありうるはずがなかったことになる。残る問題は、「文化五年軍学出精ニ付其後モアリ御憐愍御供番式人扶持」という文章の解釈である。つまり、退身後の文化五年（一八〇八）に、軍学に励んでいたことが認められて、藩主の憐愍で「式人扶持」という最下層の身分で召し抱えられたのは誰か、ということである。

これは、孫七であったとも、小四郎であったとも説める。いったい、そのどちらであったらうか。

私は、これも孫七のことではなかったかと解釈したい。つまり、孫七が藩主の勘気を蒙って退身になり、おそらくは私塾などの師匠として「軍学」を講じて生計を立てていたところ、藩主の勘気がとけたので、一八〇八年に二人扶持で再び召し抱えられたが、孫七はそれを潔しとしなかったのか、すぐにやめてしまったので、孫七の名が「絶家録」に記載されることになったのであろう。

これを、小四郎と解釈する場合の難点は、たとえ二人扶持であったにせよ、家臣として召し抱えられたのが小四郎であれば、「絶家録」の「赤尾孫七」は「赤尾小四郎」でなければならず、そのときは「八代」と史料中に記されていたであろう、ということである。おそらく、小中村にいた小四郎が福山に呼び戻されたのは、長男の早逝ということもさることながら、赤尾家自体が絶家になったという事情がより大きな要因になっていたのではなからうか。そして、福山に戻って父の「私塾」の手伝いをしていた（この間に陽明学を自習した可能性はある）と考えれば、福山藩の家臣録の中に赤尾小四郎の名が出てこないことも了解でき、その後の小四郎の軌跡も納得できるのである。

おわりに

以上のように、赤尾小四郎を追った私の旅の結論は、小四郎が福山藩の家臣であったという事実はなく、二〇〇石取り

の儒者でもなかった、それらはすべて、小四郎の「自称」か、もしくは後に作られた「伝説」にすぎないのではないか、ということである。⁽¹⁶⁾

もとより、赤尾小四郎が福山藩の儒者でなかったにせよ、赤尾小四郎が小中村を中心とした安蘇地方の教育に果した意義は、いささかも減じるものではない。また、田中正造の思想を考える上でも、ほとんど関係のないことである。それよりは、赤尾小四郎の思想がどのようなものであったかの方が、はるかに重要な問題である。しかし、残念なことに、赤尾の思想を理解する素材となる史料が残されていない現在では、それはほとんど不可能事に近い。

ここまで赤尾小四郎を追ったついでに、私は、「栃木皆川居住」という一文だけを手掛かりに、宇都宮まで出掛けてみた。もしかしたら、赤尾家は、もとは皆川城主であった皆川氏の家臣であり、皆川広照（一五四八—一六二七）が飯山藩四万石の領主として一六〇三年に転封されたときか何かの機会に一旦帰農していたところを、阿部氏に召し抱えられたのではないかと推理したからである。しかし、『栃木県史』、『宇都宮市史』、『栃木市史』などに目を通して、また栃木県立公文書館で皆川氏の家臣の名がたくさん出てくる『皆川家記』や『皆河正中録』などの資料に目を通して、赤尾の名はそのいずれにも出てこなかった。栃木県に一般的な苗字がほぼ網羅されているといわれている遅澤俊郎『栃木の苗字と家紋』（下野新聞社、一九八四年）にも、「赤尾」という項目はなかった。赤尾家のルーツは栃木にはないのかもしれない。だが、赤尾家のルーツ探しは本稿の目的ではないので、それ以上の追跡は行わなかった。

赤尾小四郎という一人の人物を追ってみて、私たちは、「通説」なるものを鵜呑みにすることの危険性に、あらためて気づかされよう。史料批判を通じた事実の検証は歴史研究の基本であるにもかかわらず、私たちは、往々にしてそれを怠りがちである。私たちに要請されているのは、「通説」なるものをたえず疑ってやまない柔軟な思考であり、先入観をすて虚に史料と向き合う姿勢であろう。このことが、正造研究の基本史料である自伝「田中正造昔話」などを分析する際にもあてはまることは、贅言を要しない。

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）

- (1) たとえば、由井正臣氏は、「赤尾賢洲の思想については必ずしもあきらかでないが、門下生からのちの出流山事件に参加したものが多かったことをみると、当時この地方の私塾にみられる勤王論の色あいの濃い教育であったと思われる」と推測している（『田中正造』四頁、岩波新書、一九八四年）。
- (2) のちにみるように、同じ『小中村史蹟』の中の「赤尾秀實伝」には、孫七は「金田丹波守の甥」とあるが、日向論文によれば、「長子」伊織が病身のため家督を突弟に譲ったから、とされている。なお、『小中村史蹟』のコピーは、岩波書店沢株正始氏のご好意で閲覧させていただいた。
- (3) 日向氏も赤尾禎一氏も、寛政八年時点の門人「富蔵」は、正造の祖父の「善造」であった可能性が高く、文政四年時に「周旋」したのも善造ではなかったかと述べておられる。
- (4) 福山藩の場合、藩主がほとんど江戸「定府」であったことから、家臣総数の四〇％を超える九二六人の江戸常駐の家臣がいたとされており、「江戸詰め」の比重は大きかった。（『福山市史』近世編、四七〇頁）
- (5) 日向氏は、「歿年から推定して、安永四（一七七五）年に生まれたとしてよいように思われる」と推定している。一方、赤尾禎一氏は、「安永三年（一七七四年）に生まれた」と断定しておられるが、そのように断定される根拠が示されていない。一七七四年生まれなら、祖父赤尾秀實が亡くなった年と同じことになる。
- (6) 天明ころと推測される「阿部御家分限記録帳」によれば、三〇〇〇石—二〇〇〇石 五人、一〇〇〇石—五〇〇石 五人、四五〇石—二五〇石 二十七人、二〇〇石—一〇〇石 一二人で、一〇〇石以上の家臣は一四九人、藩士全体の六・五％に過ぎなかった。（前掲『福山市史』四六九頁）
- (7) 『福山市史』四六九頁によれば、一人扶持は一日三合、月に一斗五升、とある。これを年に直せば一八斗二一、八石であるから、二〇人扶持は約三六石、三〇人扶持は約五四石となる。
- (8) 詳しくは調べていないが、赤尾小四郎が陽明学者であったという説は、「大塩の乱」の影響で小四郎の「思想的転換」を論じた東海林吉郎氏の『歴史よ人民のために歩め 田中正造の思想と行動Ⅰ』（太平出版社、一九七四年）が最初であろうか。また、赤尾小四郎のもとで正造が陽明学を学んだことを前提にして正造の思想を論じたものに、栗田尚弥「田中正造と陽明学」（『田中正造の世界』第三号、一九八五年一月）がある。
- (9) 以上の史料のうち、1と2の史料は、『岩槻市史』近世史料篇Ⅲ藩政史料（上）（一九八一年）にも収録されている。
- (10) 「夏取」についてはよくわからない。「夏成」（なつなり）と同じものであるうか。「夏成」ならば、大塚史学会編の『郷土史辞典』（一九五五年、朝倉書店）に、次のように説明されている。「江戸時代に関東において、畑方についておこなわれた石代納の一種である。夏期に年貢永を納めたのでこの称がある。当時は畑方の年貢も米をもって上納するのが原則であったが、実際には金銀銭をもって納入させたのであって、夏成は米二石五斗につき永一貫文の割合である。夏成が夏の収穫を基礎にしたものであることはいふまでもない。」（五二頁）

(11) この史料も、前掲『岩槻市史』に収録されている。

(12) 「大坂留主屋」とは、大坂蔵屋敷の留主居のことで、人数は一人、俵禄は一三〇石であった。その他に役料金として四〇両が給された。福山藩の大坂蔵屋敷は、人数は二〇名程度にすぎなかったが、「蔵屋敷の業務を担当し重要な役目であった」という。

(前掲『福山市史』四七九頁)

(13) ただ、『小中村史蹟』が記すように、「秀實」の命名の由来が、出生のときの「左手に米粒を握」っていたという極めて特異な逸話によるものであることが事実ならば、最初「秀澄」と称して後に「秀實」と改めたとする推定も成り立ちにくくなるので、ひとまず断定は差し控えておきたい。

(14) 濱本氏が収集した資料のほとんどは、『福山市史』の稿本（一九三一年初編二八冊、一九四五年統編二二冊）をまとめ終えた直後、一九四五年八月八日の福山空襲によって、防空壕内の稿本五冊を残して焼失してしまったということである。

(15) 引用は、広島県立文書館所蔵の東京・阿部家文書の写真版複製による。

(16) 赤尾が福山藩に儒者として仕えていた可能性はほとんどなくなったが、正造の記憶のように白河藩士であった可能性はどうであるか。この点に関しては、本稿で明らかにしたように、赤尾小四郎の祖先が阿部家に仕えていたことから、ほぼ否定できるのではないかと思われる。『福島県史』第三巻（近世Ⅱ）や第八巻（近世資料Ⅰ「白河藩」）等を見ても、赤尾小四郎が白河藩に勤仕していた事実は見えない。

(17) ちなみに、NTTの電話帳（九三・六―九四・五年版）で調べたところ、栃木県に居住している赤尾さんは一二世帯のみであった。赤尾真秀が阿部家に召し抱えられたのは、阿部正次が岩槻藩主の時代の一六一六年で、このときはまだ下野国都賀郡を増設されていなかったため、参考までにとりて埼玉県の分も調べてみたら、こちらは八一世帯あった。これだけでは何ともいえないが、もしかしたら、赤尾家のルーツは埼玉にあるのかもしれない。

本稿をまとめるにあたって、左に掲げる諸氏・諸機関に大変お世話になった。記して感謝申し上げる次第である。

広島県立文書館と研究員の西村晃氏、福山市立福山城博物館文書館と嘱託の正田勝幸氏、栃木県立図書館、栃木県立文書館、広島大学大学院の三澤純氏、熊本大学文学部の吉村豊雄氏、渡良瀬川研究会の布川了氏。

若き田中正造の師・赤尾小四郎を追って（小松）